



ともに、
豊かな地域の
時代を。



農家に学んで70年

編集一普及一農家・地域の循環

2010年3月25日、おかげさまで農文協は創立70周年を迎えました。そのキャッチフレーズは「農家に学んで70年」。

1940年（昭和15年）、戦時下に発足した農文協が敗戦の混乱のなかで事実上崩壊したとき、残された職員が自力をもって再建し、ここから、農文協の自主自立の文化運動がスタートしました。そんな農文協の大きな転機になったのが、1949年（昭和24年）春から開始された、農家への「農村文化」（現在の「現代農業」）の直接普及方式です。農家に直接普及しながら農家の悩みや要望をつかみ、雑誌や書籍の編集に反映させていく…「農家に学んで70年」の本格的な歩みはここから始まります。

農文協の基幹雑誌・「現代農業」は、農村に暮らす農家自身がみんなで作っている雑誌だと考えています。日々、自然や作物とのつきあいのなかで技術を磨き、むらの中で暮らしている農家の工夫や知恵に学んで、毎月の「現代農業」ができあがります。編集部の役割とは、それをちゃんと感じ取り、受け止め、よりよい形で表現するという点にあるのだと認識しています。バイクで一軒一軒の農家におじゃましている農文協の普及（営業）職員の活動も、農家から聞いたり見たりしたことを他の農家に伝え、編集に反映させ、「農家がつくる雑誌」づくりを担っています。

70年の節目を迎えたいま、農文協の活動の生命線ともいうべき、編集一普及一農家・地域の循環的な関係を一層強めながら歩み続けたいと、気持ちを新たにしています。

大世代交代期

「国民皆農時代」が見えてくる

農家の高齢化・農村の担い手不足が心配されていますが、団塊の世代が定年期を迎え、今後しばらくは続く世代交代の時期を、未来をひらく時期にしたいと思います。

定年帰農や農村にむかう若者が増え、元役場・元農協職員、元会社員がむらにもどって活躍し、都市近郊では第二の人生をもとめて「市民農業者」が増える。子どもの農業体験はいよいよ盛んになり、農家・自然に思いを寄せる都市の生活者が増え、直売所はますます賑わい、「地産地消」で人々の絆が深まる…そんな時代にしたいのです。

それは、「変わりつつ変わらない」農耕と日常生活文化を伝承していく過程でもあります。

育てることは学ぶこと。農家はイネやトマトや牛と会話し学びながら、作物や家畜がもっている力を引き出すように育てる。そんな農耕労働の本質は、いかに施設や機械が進歩しても変わることはありません。

“自給”を基本に「お裾分け」という農産物の届け方、農家ならではの「自給の思想」は、直売所など「地産地消」という形で引き継がれ、大きな動きになっています。

農家の土地やむらへの思いも変わりません。大規模農家、集落営農から自給農家・兼業農家まで、むらを守ろうという取り組みが、地域住民や都市民を巻き込みながら各地で広がっています。

こうして、大世代交代期を、豊かな「国民皆農時代」が見えてくる時代にしたいと思います。

地域の再生

「地域という業態」を創造する

激しく動く経済や政治とは次元を異にして、いま、より本源的に、そして、理念に留まらず現実的・実践的な課題として、「地域の再生」「地域の自立」にむけた取り組みが着実に進んでいます。中央に身をゆだねるのではなく、地域内の自立的な産業・仕事・暮らしを築こうとする営みは、昔から続けてきたむらの生き方であり、それが新しい形を伴いつつ、地域をつくり続けているのが、現代という時代です。

経済成長期を支えた業種タテ割り中央集権の社会構造ではなく、地域に生きる人びとが業種の壁を越えて関係を結び直し、地域の自然風土、農に根ざした農工商連携、医食農想（教育）連携の新たな社会構造＝「地域という業態」を創造する。それこそが、「この国のかたち」に希望のベクトルを与え、グローバリズムに翻弄される世界の地域の困難を打開し、平和な世界をつくる国際連帯の道です。

この「地域の再生」にむけた活動の最前線が、現在7つある農文協の支部です。地域の結び役として、支部の活動を一層精力的に展開していきたいと考えています。

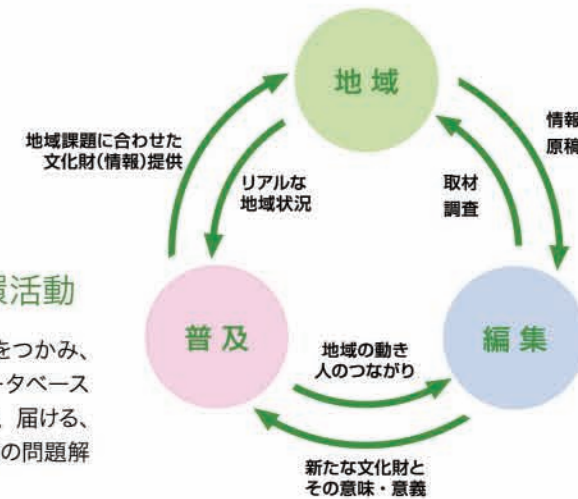
「地域の再生」にむけた編集・普及活動に、農文協は全力をあげて取り組みます。

ともに、豊かな地域の時代を。

2010年4月
社団法人 農山漁村文化協会（農文協）
役職員一同

地域を元気にする情報循環活動

地域住民と直接出会うことで地域情報をつかみ、課題解決のための情報を出版物やデータベースなどの「文化財」に編集し、地域に返す、届ける、広げる（普及する）。この繰り返して地域の問題解決力を触発し、深める。





地域の元気をつなげます 農文協の普及活動

情報循環活動の柱である「普及」とは、単なる営業活動ではありません。公の指導機関でもなく、専門家の調査研究でもなく、本や情報を販売する仕事だからこそ、地域の動きをリアルに感じることができ、本当に求められている情報とは何かがわかるのです。



こんにちは。
「現代農業」の
農文協です！



農文協普及職員 ケイコ
入社3年目、普及で訪れた県
は20を超える。今日はA県の
B市一帯を1年ぶりに訪問。

生ゴミ堆肥をつくれば
ゴミも減らせるし地元
の野菜づくりに活用し
てもらえるの。

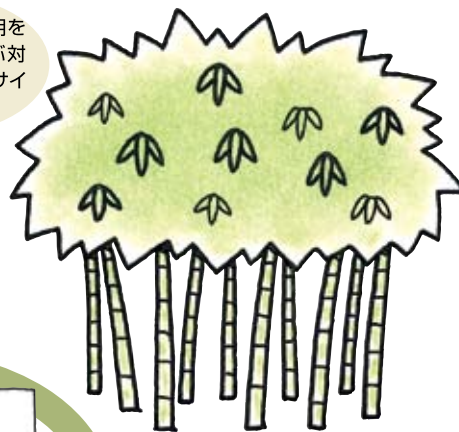
市役所



市民Kさん

環境課長Jさん

竹パウダーの利用を
進めれば、竹やぶ対
策にも、生ゴミリサイ
クルにもなるな～



小学校

先生も子どもも田
んぼや畑が楽しくな
る知恵満載です！

学校園にモミガラを
入れたら、い～い畑
になったよ！



学校で使えるな
ら、モミガラ、使
ってください。

農家Mさん



商工会



地元の宝を見つけ
て「毎月あと3万
円の仕事」をおこ
しましょう！



国産の安全・
安心野菜がほ
しいんです。
外食チェーン・
バイヤー氏

モミガラと竹堆肥で
育てたわが町の安心
野菜を売り出そう。

販売部長Iさん



JA〇〇

農業電子図書館で
竹・モミガラ活用
の事例がまとめて
わかるようにしてく
れないか。

営農部長
Hさん

わかりました。
農家の経費節
約になりますね！



農家Dさん

モミガラは燃料にも
いいよ。今年は重油
を1000リットル節約
できた。

ゆっくり燃
えるのがい
いんですね。



「現代農業」に出ていた
モミガラ培土でイチゴを
始めたよ。軽いし、安いし、
これはいいね！

農家Cさん

甘くて
おいしい！



直売所
まかせな菜



手づくりメンマに
手編みの竹カゴ、
人気商品よ！

去年よりもお客
さんも品数も
増えてる！



農家Fさん

うちも竹林が荒れて
困ってるんだよー。こ
のあたりは多いよね。

書店の主人Gさん



竹の利用法が
注目されてる
みたいですよ。

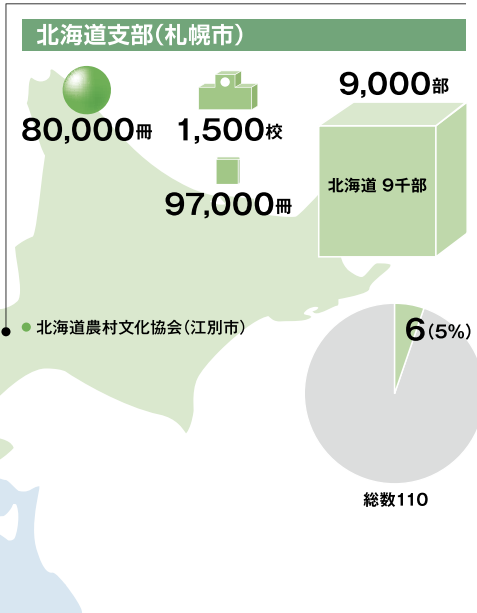
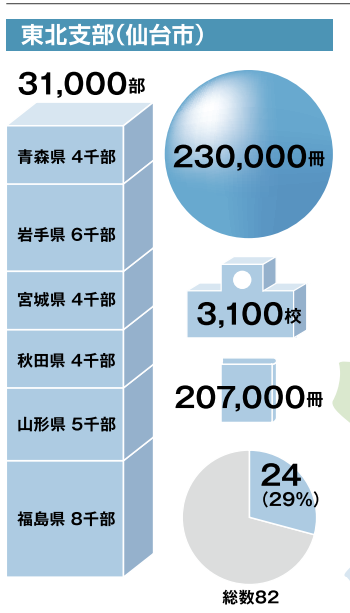
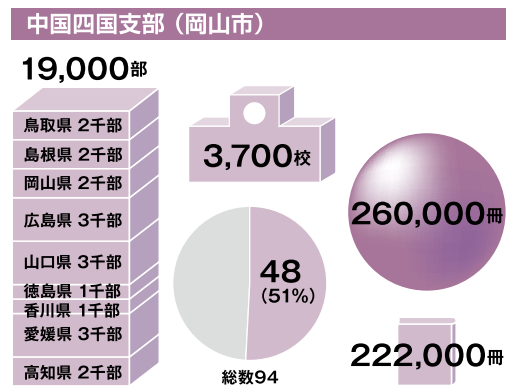
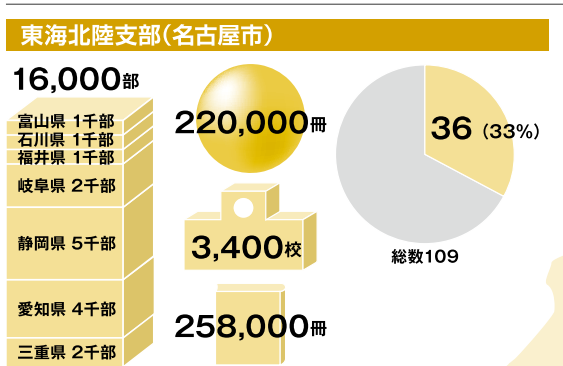
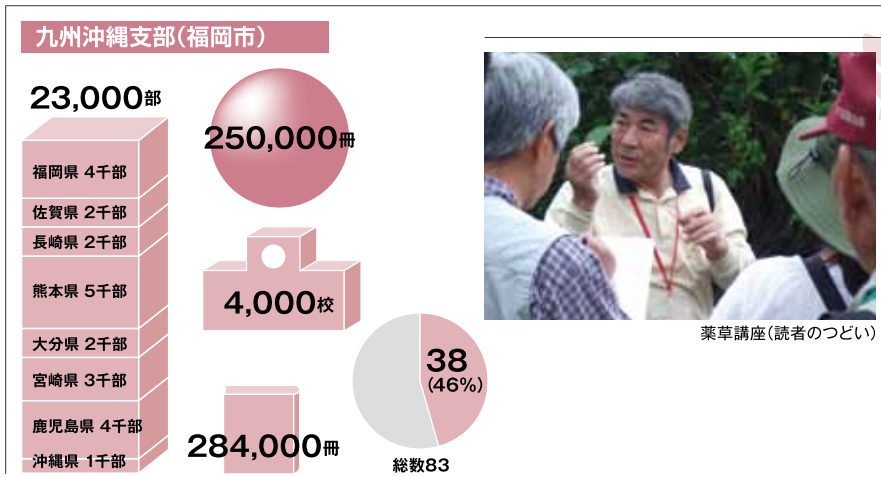
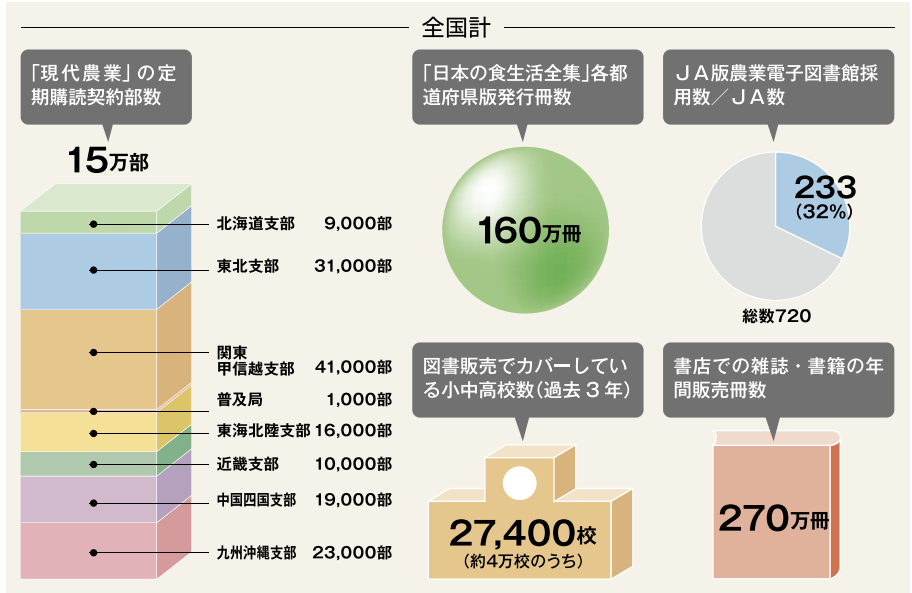


みんなの「こうしたい」がつな
がって、地域の元気が出てきた
みたい！ 次の地域のみな
さんに、いいおみやげ話がで
きたな。また、お邪魔しますね。
ありがとうございました！

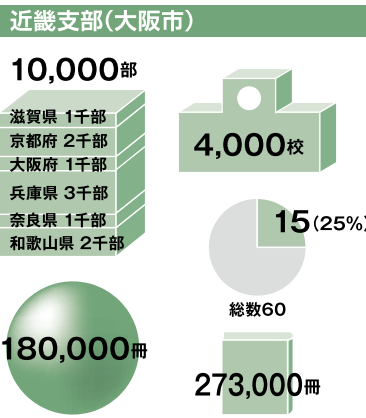
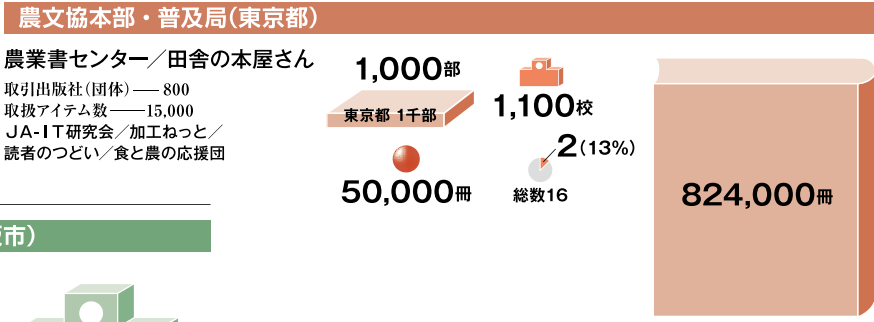
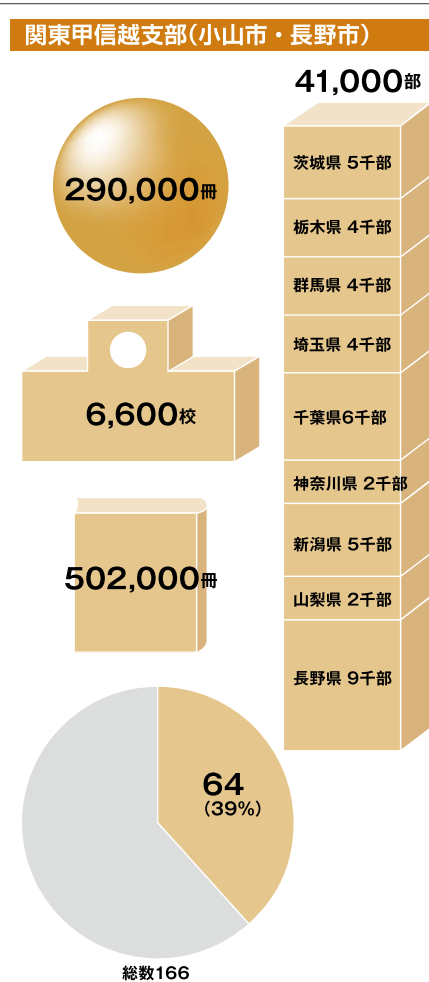


地域に根ざし、全国をカバーする
農文協の普及組織と事業

大都市から山間地の農村や離島まで、日常的な普及活動で地域を巡回しているのが、全国の7つの支部です。



農文協・梅池センター(長野県小谷村)
つけもの講座(読者のつどい)



＊東京・大手町のJAビルに全国で唯一の農業専門書店「農業書サービスセンター」を開設。一般の書店では流通していないものも含めた品揃えで、利用者は全国に。
＊書店がない地域の方のためには通販書店システム「田舎の本屋さん」を運営。「農業書サービスセンター」の豊富な在庫を生かして、農業関連なら「読みたい本がどこよりも多く、どこよりも早く手に入る」と好評。
＊「現代農業」の読者が集い、農業技術や食品加工のワザを学びあう「読者のつどい」や、農文協も事務局などの形で協力し、地域の農業・農村問題を考える地域協議会などが各地で活動中。



福島の作業名人「サトちゃん」（左端）と三重の農家が代かき談義



現代農業

(月刊)

月刊「現代農業」には、全国の農家の創意工夫と夢と笑顔が詰まっています。世の中には「日本農業は高齢化で暗い・未来がない」と論じる人たちがたくさんいますが、それはどうも現場から遠い抽象的・客観的立場からのみの論説のようです。田畑の作物と毎日向き合っている農家一人一人の具体的な視点から記事をつくると、「こうすればもっと美味しい作物になるぞ」「ああやればもっとラクに作業できる」と常に前向きな提案が出てきます。

今、農村の動きの特徴をあげると、
○全国各地にできた「直売所」を起点に流通革命が起こり、農家の「やり甲斐」が急拡大。元気の源になっている
○むらは世代交代期。定年後に農業を始める人たちなどへの技術伝承が盛ん

○肥料代・エサ代など資材高騰の波を受けて、身のまわりの有機物(米ヌカ・モミガラ・竹・落ち葉・堆肥など)を活かす技に最大関心

そんな農家の気持ちと関心をダイレクトに受けて、毎月の特集を企画しています。好評なのは、「直売所名人」や「耕耘・代かき名人」「発芽名人」などの、技術を伝えろ名人になる!」シリーズや、「こうじ菌」「乳酸菌」「酵母菌」「光合成細菌」など田畑と暮らし両方の面での微生物活用シリーズなど。また、農業をなるべく減らす工夫や手づくり自然農業の記事、野山の草木で健康を自給したり販売に結びつけたりする記事も評判です。

誌面は特集ページのほか、稲作や野菜・果樹・畜産など作目別の技術ページに分か

れ、そのほかにも機械情報や暮らし・経営・地域づくりに至るまで、農家・農村のまろごと実用誌となっています。どの記事も「読んでワクワクする」「心に沁みる」ことを編集上の目標としています。

農家にはもともと、作物や自然とつきあう能力・身のまわりのものを捨てずに活用する技・家族や地域の人たちと力を合わせて生き抜く知恵などが備わっています。「現代農業」はそんな農家の知恵や日々の思いがそのまま反映されてできた雑誌、つまり「農家がつくる雑誌」です。

農業に注目する人が増えてきた昨今の情勢を、農家も喜んでます。「現代農業」の誌面も、ますます元気になっています。



毎月、記者が全国の現場を取材

季刊 地域

いま、政治や経済がいかによろこぶと、「ゆるがぬ暮らし」「ゆるがぬ地域」をつくり出そうとするさまざまな実践が各地で行なわれています。「季刊 地域」は、そうした人びとや地域に学び、地域に生き、地域を担い、地域をつくらうとする人びとのための雑誌です。また「季刊 地域」は、農村から都市に「農のある暮らし」「自然な暮らし」を呼びかけてきた「増刊現代農業」が生まれ変わったものです。「ゆるがぬ暮らし」「ゆるがぬ地域」の根底に、「ゆるがぬ農」が必要であることに変わりはありません。「季刊 地域」は住民自身が当事者となって、自給と相互扶助の農の思想にもとづき暮らしと地域の課題を解決していくための総合実用誌をめざします。



地域の農を地域で支える「鳴子の米プロジェクト」が開いたおむすび食堂「むすびや」

うかたま

(季刊)

衣食住が外部化され、家庭や地域が空洞化した現代社会に現われた身体や環境の「ほころび」。それらをつなぎ合わせるため、日々の暮らしを自分の手で築いてきたおばあちゃん世代の知恵や技を次世代に伝えていく。宇迦之魂神、食の神様にあやかって名付けた「うかたま」という誌名にはそんな願いを込めています。

誌面で登場する農家のお母さんたちがつくる昔ながらの保存食のレシピや、身の回りのものを無駄なく活かす暮らしぶりが、食べることを大切にしたい、自給自足の生活に憧れる…そんな女性読者を中心に受け入れられています。本棚に並べるのではなく、台所に持ち込んで油染みができるまで使える、「捨てられない雑誌」です。



すり鉢でついた丸いご飯のだんごがかわいい、秋田の「だまこ汁」。きりたんぽより手軽

食農教育

(隔月刊)

そだてる(農)、たべる(食)という、人間が生きていく営みのもっとも基本となる活動をベースに、手足を汚し、汗をかいて、身体全体を働かせる。そんな体験の方法を、全国の実践者の知恵や工夫をとおして紹介しています。「ペットボトル稲VSバケツ稲」「ギョツとおにぎり!」「ワラを生かせ!」「給食メニューをシンプルに」……といった身近なテーマで、子どもたちと先生と地域がともに元気になる実践や学びを探究。学校に子どもを預け、勉強や食事を一任するのではなく、おらが地域の学校を核に、農林漁家と教員・栄養士・調理員がつながり、親や住民も参加して、みんなで子どもたちを一人前に育てていく。そんな地域をつくるための雑誌です。



保育園児が生ゴミリサイクル畑づくり

地域をつくる 四つの実用雑誌



現場・地域の課題解決に貢献する 情報データベース

農業技術や生活技術は土地土地で異なり、また毎年の気候で異なります。そのため農家の経験はけっして古くなりません。それぞれの地域や経営にあった情報の取捨選択が必要な農家こそ、データベースを活かすことができます。

また、JAや農業高校など地域に根ざした活動を行なっている団体向けには、利用者や地域に合わせて情報やメニューをカスタマイズして提供しています。

農家のための 農業総合情報センター ルーラル電子図書館

インターネットを通じて利用できる国内最大の農業データベースで、データは日々更新追加されています。栽培・防除・加工販売から作業まで、農業情報なら何でも揃います。

新しい品目や販売方法に取り組むとき、作型や作業を見直すとき、あるいは世代交代で技術を引継ぐときなどの力強い味方です。

収録されている主なデータは、「現代農業」（1985年以降）、「農業技術大系」（6編56巻63分冊）、「防除総覧」（430作物3100病虫害）、「食品加工総覧」（401地域素材）、「日本の食生活全集」（全国300地域）、「農業入門シリーズ」、ビデオライブラリなど現場で役立つものばかり。

携帯電話等を使って、現地での利用もはじまっています。



圃場で作物を目の前に病虫害診断もできる

地域に根ざした 農業協同組合運動の再構築 JA版農業電子図書館

直売所などの安全安心な生産を支える営農指導の基礎情報を充実させ、支店窓口での組合員相談を支援しています。

各JAにあわせて取扱い農業や栽培指針などがカスタマイズされ、全国237JA、約1,500箇所のJA支店・資材店舗の窓口で稼働しています。指一本で操作できるタッチパネル式なのも人気です。



JA版トップページ画面



「何の病気が」が一目でわかる写真目次



田畑を荒らす動物の習性や弱点を知り、アイデアあふれる対策で撃退！



高校版トップページ画面

地域と学校を結び、 交流・提携学習を支援する 高校版 ルーラル電子図書館

農場管理から教科学習、プロジェクト学習まで、地域に立脚した特色ある高校づくりのための、高校向け特別メニューが用意されています。

「農業鑑定トレーニングコーナー」「教科学習コーナー」「プロジェクト学習コーナー」など、職員室や教室、農場でも利用されています。

最新の研究情報と 現場をつなぎ、 多次元利用を展開

データベースに収録される情報は、現場の農家の疑問や悩み、地域の課題を解決するために、農文協の依頼に応じて全国の試験研究機関や農業指導者などから次々に寄せられます。編集部は農家から学んだニーズを農家に代わって研究者に伝え、現場とつながった実践的な研究をわかりやすい情報にしていきます。こうして蓄積される情報は、インターネットを通じた利用だけでなく、毎年追録更新される「農業技術大系」や「農業総覧」としても利用でき、テーマに応じた「百科」や「最新農業技術」などの本としても提供されます。



農の文化財

農文協では出版物や映像作品、データベースを「文化財」と呼んでいます。これらの情報に接して考え方を深め、仕事や暮らしの実践を変えていく。そのことで新たな日常生活文化が創り出されていく。政治活動や社会運動よりも根底的なところで、一人ひとりの生き方を創造するために利用し

てもらうために制作し普及するものなので、私たちの活動は文化運動であり、届ける作品は文化財だと考えているのです。
その中で、農に関する文化財は農文協の出版活動の根幹をなしているものです。

農業生産技術

- ・世代交代期を支える技術の継承と創造
- ・生涯現役農業
- ・豊かな生命空間づくり
- ・地域資源を活用した循環型農業

むらづくり・地域の再生

- ・農家経営・集落営農
- ・食品加工・風土産業
- ・地域コミュニティ
- ・食料・農業・農政問題

農の教育力

- ・自然と子どもたちをつなぐ絵本・児童書
- ・学校教育での農業体験・栽培学習テキスト
- ・農業高校教科書
- ・教育雑誌





まちに 農の風を 届ける 文化財

いま、農家と非農家の距離はかつてなく縮まっています。自分の暮らしを自分でつくるのが農家の暮らしの根本。政治や経済がどう変化してもゆるがぬ暮らしへのあこがれは、都市住民を含めた全国民に広がっています。

1984年から1993年にかけて発行・完結した「日本の食生活全集」は、昭和初期の台所を担ったおばあちゃんたちへの聞き書きにより、生産と生活が一体となった「自給」

の豊かさや地域ごとの個性を浮き彫りにしました。この時代の庶民の当たり前の暮らしの記憶を記録するにはギリギリのタイミングでした。

この全集は農村部のみならず全国で読まれ、地域の風土に従いながらも風土を活かしてより豊かな暮らしを实践したいと考える人々に読み継がれています。料理・家庭園芸・健康書などの実用書も、これからの新しい自給生活をめざして制作されています。

家庭園芸書

- ・家庭園芸・ミニ＆ベランダ園芸
- ・野菜との“会話力”を高める
- ・有機無農薬栽培
- ・自然派・和風からローズガーデンまで庭づくり
- ・伝統園芸 菊・盆栽
- ・命を育む園芸学習

料理書・生活書

- ・日本の食素材・食技術を伝承する
- ・身近な野草や野菜が健康をつくる
- ・自給のカナメ 発酵食品／手づくり酒
- ・手づくり・自然派お菓子
- ・国産小麦パン、国産米粉活用
- ・世界の家庭料理
- ・住まい・暮らしの自給技術

健康書

- ・出産・育児から思春期まで
- ・子どもの健康
- ・食と健康
- ・健康を自給する方法と思想



日本とアジアの未来を拓く 地域諸団体との 提携・受託活動

農文協は、農の復権と地域の再生をめざす諸団体の取り組みを応援するため、これまで培った情報力、企画制作力、組織運営力を生かした提携・受託活動を展開しています。

その活動は、国内外での研究・交流事業から人材育成・広報支援、課題解決に向けた各種出版受託、業務・学習支援ソフトの開発等、多岐にわたり展開中です。発注者と受注者という関係を超えて、諸団体と農文協がそれぞれの個性・特質とともに発展させられるような創造的な提携・受託活動をめざしています。

JAとの提携

“営農関連事業を中心にした農協づくり”をめざす「JA-IT研究会」（設立：2001年）事務局を全国農業協同組合中央会（全中）とともに担当。単位協同組合（単協）を主体に、“農家手取り最優先”を追究する新たな販売事業の研究・実践や人材育成に関するセミナー等多彩に取り組んでいます。

また、JA窓口での営農・資材相談を支援する「JA版農業電子図書館」を開発（p10参照）。JA-IT研究会の中に「営農支援システム」を検討する専門研究会を設けつつ、現場ニーズに即した支援システム開発を、JAとの協力の下に取り組んでいます。さらに、JA役職員の理論学習を支援するためJA総合研究所の「研究叢書」を2010年より刊行。地域の再生の要となるJAを多岐にわたって支援しています。



農業高校との提携

日本の全農業高校生（約9万人）が加入する日本学校農業クラブ連盟の機関誌「リーダーシップ」の企画制作を担当。農業の楽しさを知り、農高生としてのモチベーションを高める機関誌づくりに取り組み、農高生・教師・父兄からの高い評価を得ています。また、課題研究や各種の検定・鑑定競技の学習支援のためのデータベース・サイト「高校版 ルーラル電子図書館」を独自に構築・提供し、農高の農業学習を応援しています。

中国との提携

数千年の歴史をもつ中国農業は万巻の書物を通して、また技術や種子を介して日本の農業に大きな影響を与えてきました。その奥深い伝統の上に近代化を目指す中国の農家と、中国より一足先に近代化したのがその負の遺産からの脱却を図っている日本の農家との交流・学び合い・信頼の回復こそ、両国の農家にとって極めて有効というだけでなく、アジア・アフリカ・中南米いや全世界がぶつかっている人口、食糧、資源、環境問題の解決に有効であると思います。農文協は日中双方の農家同士の交流を中核として、農民組織、研究者、指導者、メーカー相互の交流発展のために活動しています。



（写真上）農文協と江蘇省鎮江市が共同開催した「中日韓農業発酵技術普及会」のため訪中した日本側講師
（写真下）日中の共同作業で作成された中国農村部の振興計画（左）は、日本でも出版（右）



多彩な出版で 地域づくりを応援

農文協は、農と結びついた地域からの生活感あふれる情報発信が日本の暮らしを守り発展させると信じて、市町村やJA・団体と提携し、「食と農」をテーマに様々な「地域に根ざした地域出版」に取り組んできました。

「○○町の風土記」や「○○県の農業」といった作品は、地域の風土と伝統的な食と農の学習教材としてだけでなく、地域興しを考える原点ともなっています。



長野県飯綱町の、風土を生かした伝統的な食生活を聞き書きしてまとめた本



（財）愛知県農業振興基金が発行し、県下全域の小学校に配布された副読本

農文協のあゆみ

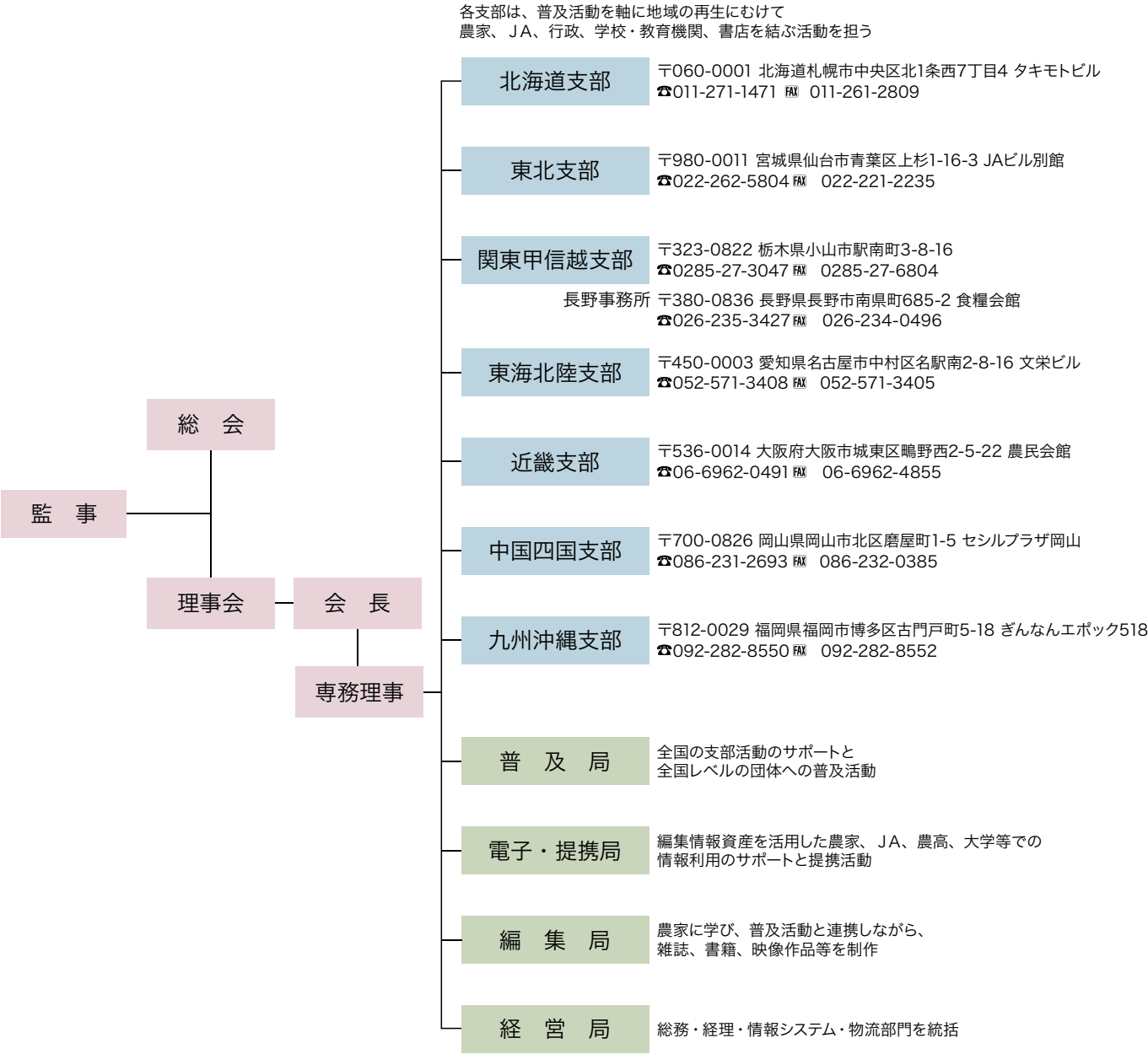
農文協のトピック	年号	世の中の動き
1922 「現代農業」の前身「農政研究」が大日本農政学会機関誌として古瀬伝蔵により創刊、草の根の民意を発掘し中央に発信、議員・学者・農政記者の情報共有と世論形成をになう	1922 T11	1922 日本農民組合創立（賀川豊彦ら）
	1937 S12	1937 日中戦争起こる／日独伊防共協定調印／大本営設置
1940 民法34条公益社団法人として認可・設立（会長 有馬頼章）／「農政研究」を「農村文化」に改題、経済政策中心の文化運動から慰安事業中心の文化運動へ傾斜	1940 S15	1940 日独伊三国同盟／大政翼賛会成立
1942 協会専属として「瑞穂劇団」発足	1941 S16	1941 太平洋戦争起こる
1943 紙芝居7点、演芸221回	1942 S17	
1944 紙芝居3点、スライド20点、演芸995回、単行本6点	1943 S18	
1946 職員組合結成、農村文化運動の農文協独自な在り方を模索	1944 S19	
1947 経営混乱し職員組合による管理に	1945 S20	1945 敗戦
1949 再建農文協スタート。雑誌の直接普及方式導入、文化財による文化運動が始まる	1946 S21	1946 農地改革／日本国憲法発布
1950 「農村文化」に連載講座「肥料の上手な使い方」、単行本「誰にもわかる肥料の知識」、スライド「硫酸は深肥で」を発行／食糧増産運動に寄与	1947 S22	
 	1949 S24	1949 中華人民共和国成立
	1950 S25	1950 朝鮮戦争
	1951 S26	1951 サンフランシスコ講和条約
	1952 S27	1952 血のメーデー事件

農文協のトピック	年号	世の中の動き
1957 第1次5ヵ年計画発足	1955 S30	1955 高度経済成長
1960 第1機構改革と農文協綱領草案／第1次10ヵ年計画発足／「農村文化」を「現代農業」に改題＝「農家に学ぶ」路線の定着化（編集部記事の増加、「雑誌の編集が同時に文化運動」というエネルギー）	1957 S32	
1962 職員養成講習開始。「農業総覧」発行開始／職員教育を契機に「農民のための雑誌・書籍の創造と普及」の実践を「文化財論」「普及論」として理論化／講習による新普及方式と雑誌の内容改善によって発行部数急増（3万5千部から69年13万部へ）	1960 S35	1960 安保闘争
1963 農業高校教科書発行開始	1961 S36	1961 農業基本法公布
1964 農基法の「選択的拡大」路線に対抗「米が足りない」特集からイナ作増収運動（片倉イナ作）と水田プラスアルファ方式（玉川農協）の全国展開へ／東北支部設置（仙台市）	1962 S37	
1965 北陸支部設置（長岡市、のち長野市）	1963 S38	
1966 関東支部設置（小山市）	1964 S39	1964 東京オリンピック
1970 第2次10ヵ年計画発足。東京・赤坂に事務所移転。「現代農業」に主張欄を設置、「近代化路線にまどわされるな」「新しい自給生活を創り出そう」／農家の自給の思想にもとづく自給経済生活圏の提唱	1965 S40	
1972 九州支部設置（福岡市）	1966 S41	
1970 減反開始／大阪万博	1970 S45	
1972 国連「人間環境会議」ストックホルム	1972 S47	
1973 石油ショック	1973 S48	

農文協のトピック	年号	世の中の動き
1974 「近藤康男著作集」発行開始（全集の刊行はじまる）	1974 S49	
	1976 S51	
1976 「農村文化運動理論(草案)」発表、「経済合理主義」と「科学主義」を克服して自給的小農複合経営の確立をめざす／中国四国支部（岡山市）、北海道支所（札幌市）設置	1977 S52	
1977 「日本農書全集」「人間選書」刊行開始、農の視座（地方・労働・暮らし・人間）から都市（医食農想四領域）への働きかけを開始	1978 S53	1978 日中平和友好条約調印
1979 東海近畿支部設置（名古屋市）	1979 S54	1979 第2次石油ショック
1980 第3次10ヵ年計画発足。農文協図書館設立	1980 S55	
1983 スライド「安定イネ作り」シリーズ	1983 S58	
1984 「日本の食生活全集」刊行開始、農家の全存在（生産と生活）を記録保存する活動から伝承復活の産直運動へ／四年連続不作・韓国米緊急輸入に対抗する自然力活用のイナ作増収運動	1984 S59	1984 韓国米輸入
1985 アジア「小農」思想の実践交流を日中間ですすめるため図書の寄贈・出版交流を開始	1985 S60	1985 ブラザ合意
1986 食糧・農業問題全集刊行開始／絵本の刊行開始（「ふるさとを見直す絵本」）	1986 S61	1986 チェルノブイリ原発事故
1987 「安藤昌益全集」が毎日出版文化賞受賞	1987 S62	1987 ブラックマンデー
	1989 H元	1989 天安門事件／ベルリンの壁崩壊
1990 第4次10ヵ年計画発足	1990 H2	1990 バブル崩壊
1991 北京に「中日農業技術交流文献陳列室」を開設	1991 H3	1991 湾岸戦争／ソ連崩壊
1992 児童図書販売グループ「NCLの会」発足	1992 H4	

農文協のトピック	年号	世の中の動き
1993 気象災害とMA米輸入、この未曾有の危機をはね返す「米－依増収運動」と「米プラスα」産直運動の全国展開（現代農業・増刊現代農業とも一万部増へ）／大阪支所設置（大阪市）	1993 H5	1993 EU発足／平成の凶作／GATT・ウルグアイラウンド妥結
1994 農業専門書店「農書サービスセンター」を開設	1994 H6	
1995 「増刊現代農業」が「産直革命」を特集	1995 H7	1995 WTO発足／阪神淡路大震災／新食糧法
1996 「ルーラル電子図書館」開設	1996 H8	
1997 「そだててあそぼう」刊行開始／北京に「日本農業科学技術応用研究室」開設	1997 H9	
1998 「増刊現代農業」が「定年帰農6万人の人生二毛作」を特集／「食農教育」創刊	1998 H10	
	1999 H11	
2000 第5次10ヵ年計画発足／中国の河北省・江蘇省との農家交流開始	2000 H12	
2001 農協の営農経済事業の刷新を図る「JA－IT研究会」設立／農水省補助事業（健全な食生活普及浸透事業）・地域に根ざした食生活コンクールほか実施（2カ年）	2001 H13	2001 アメリカ同時多発テロ
2002 「日本農書全集」が朝日新聞「明日への環境賞」受賞	2002 H14	
2003 農水省補助事業（食育促進全国活動推進事業）・地域に根ざした食育コンクールほか実施（2カ年）／2005年からは、にっぽん食育推進事業として、同コンクールほか継続実施（5カ年）	2003 H15	
2005 現代農業復刊700号記念特集「自然力を生かす 農家の技術早分かり事典」発行／「季刊うかたま」創刊	2004 H16	
2006 「JA版農業電子図書館」を稼働	2005 H17	
	2006 H18	
2007 現代農業復刊60周年記念特集「現代農業ベストセレクト集」発行	2007 H19	2007 世界食料危機
2008 農水省補助事業（にっぽん食育推進事業）・教育ファーム推進事業実施（2カ年）	2008 H20	2008 リーマン・ショック
2009 「三澤勝衛著作集」「シリーズ地域の再生」刊行開始	2009 H21	2009 日本・政権交代
2010 第6次10ヵ年計画発足。「増刊現代農業」を「季刊 地域」にリニューアル／「JA－IT研究会」にJA版農業電子図書館の利用交流をすすめる「営農システム研究会」を併設	2010 H22	

農文協の組織



関連会社・組織

- 株式会社 文協社
- 農文協などの出版社と書店・生協・学校・個人読者をつなぐ出版総合物流サービス
- 株式会社 新制作社
- WEBコンテンツから自費出版まで、地域情報の発信をサポートする編集制作会社
- 財団法人 農文協図書館
- 一般に開かれた農と食の専門図書館
- 財団法人 亜細亜農業技術交流協会
- 中国を中心に、21世紀に求められる農業技術情報の国際交流を担う
- 長野県農村文化協会
- 長野の地域文化の伝承と、研修・食農教育活動の施設「柵池センター」の管理・運営

社団法人 農山漁村文化協会
(略称 農文協)

本部 ● 東京都港区赤坂7丁目6番1号
TEL ● 03-3585-1141 (大代表)

支 部 ● 全国に7支部あり
会長理事 ● 濱口 義曠
役 員 ● 23名
設 立 ● 1940年(昭和15年)3月25日
職 員 ● 180名

役員の構成

会長理事	濱口 義曠	(財)日本穀物検定協会 顧問
副会長理事	坂本 尚	(社)農山漁村文化協会 (非常勤)
専務理事	伊藤 富士男	(社)農山漁村文化協会
常務理事	齋藤 春夫	(社)農山漁村文化協会
理事	豊島 至	(社)農山漁村文化協会
理事	広田 紀雄	(社)農山漁村文化協会
理事	原田 津	(社)農山漁村文化協会 (非常勤)
理事	栗田 庄一	(社)農山漁村文化協会 (非常勤)
理事	松尾 孝嶺	東京大学名誉教授
理事	青木 志郎	東京工業大学名誉教授
理事	熊沢 喜久雄	東京大学名誉教授
理事	日下 孝之	農林中央金庫 元副理事長
理事	今村 奈良臣	東京大学名誉教授
理事	倉地 貞三	全国農業協同組合連合会 元常任監事
理事	小田切 徳美	明治大学農学部 教授
理事	伊藤 澄一	全国農業協同組合中央会 常務理事
理事	奥野 和雄	全国農業協同組合連合会 参事
理事	飯田 英章	農林中央金庫 常務理事
理事	榎本 進	全国厚生農業協同組合連合会 代表理事理事長
理事	根岸 隆	日本学士院会員
理事	本間 博文	放送大学教授
監事	青木 計夫	農林中央金庫 元専務理事
監事	原田 勉	農文協図書館 前常務理事

農文協 事業案内 2010年6月4日発行
撮影・写真提供●橋本紘二／黒澤義教／倉持正実／安部祐輝／高木あつ子／大浦佳代／小倉隆人
レイアウト・デザイン●株式会社 アルファ・デザイン 印刷・製本●株式会社 秋巧社

